

令和7年度 在家小学校 校内研修「共に学び合い確かな学力を身に付ける児童の育成」

在家小学校では、現在「学びの共同体」の理論に基づいた学習に取り組んでいます。そして、6月26日（木）、本校において「学びの共同体」授業公開が行われました。全ての学級が授業を公開し、教員同士がお互いの授業を見合い、協議会を行いました。



<「学びの共同体」Q&A>

○「学びの共同体」とは何ですか？

東京大学名誉教授、教育学博士である佐藤学氏が提唱した学校教育における新しい理論体系・枠組みのことです。本校だけではなく、神根地区の小中学校で令和5年度から取り組んできました。本校は、今年度もこの取組を継続しています。

○「学びの共同体」にはどんな特徴があるのですか？

協働的な学びを重視します。19、20世紀型の教師に見られる「教える専門家」による一斉授業ではなく、21世紀型の教師が目指すべき「学びの専門家」が学びをデザインします。児童が4人組（低学年はペア）のグループになり、互いに聴き合い、学び合うことを重視します。知識の伝達だけでなく、思考力、判断力、表現力といった資質・能力を育むことを目指します。

○授業についていけない子がいたらどうしますか？

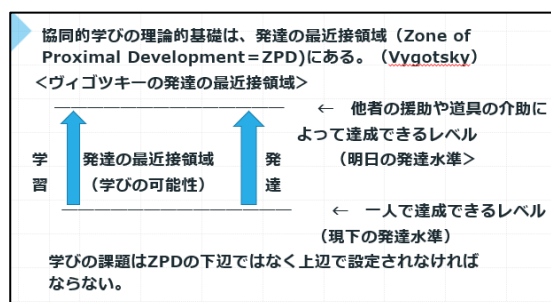
「学びの共同体」では、「一人も残らず子供たちの学びの権利を実現し、学びの質を高めること」を目指します。授業で分からないことがあったときには、「教えて。」と友達に聞きます。また、「教えて。」と言える子供を育てます。友達から「教えて。」と言われたときは、分かりやすく教えます。教える側にも説明する力がつきます。

○「ジャンプの課題」って何ですか？

「学びの共同体」では、一時間の授業を「共有の課題（教科書の問題）」と「ジャンプの課題（応用問題）」でデザインします。応用問題は学級の児童の3分の1程度が解けるレベルの問題です。

○なぜそのような難しい問題に取り組むのですか？

学びには「一人で達成できるレベル」があり、その上に「他者の援助や道具の介助によって達成できるレベル」があります。学校において、質の高い学びを実現するためには、学びのレベルを「一人で達成できるレベル」より高く、「他者の援助や道具の介助によって達成できるレベル」を越えないレベルにするということが、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」に基づいた「学びの共同体」の理論になります。在家小学校では、算数科においては授業時



数の50%以上で「ジャンプの課題」を実施することを目標とし、今年度は更に他の教科においても「ジャンプの課題」に取り組み始めました。

○ジャンプの課題の具体例を教えてください。

【4年生「面積のくらべ方と表し方」より】

<p>共有の課題</p> <p>長方形の面積を計算で求めましょう。</p> 	<p>ジャンプの課題</p> <p><指令></p> <p>右の図、算数ロボ「PONKO II」の面積を15分以内に求めよ。</p> <p>1まずは1cm²とする。また、しゃ線の部分だけ求めるものとする。</p> 
<p>共有の課題</p> <p>たてが20m、横が40mの長方形の形をした畑の面積は何m²ですか。</p>	<p>ジャンプの課題</p> <p>在家小学校のしき地面積を以下の単位で求めましょう。</p> <p>①m² ②a ③ha</p> 

「ジャンプの課題」は難しいですが、子供たちは楽しく意欲的に問題に取り組んでいます。「学びの共同体」の取り組みを始めて3年経ちますが、学年が上の子供達ほど、友達に「教えて。」と気楽に尋ねられる人間関係やコミュニケーション能力が身に付いてきています。また、教員にとっても教材研究をすることで、専門性を高める機会になります。

○実際に「学びの共同体」の取り組みに効果はあったのですか。

本校では、研究テーマを「共に学び合い確かな学力を身に付ける児童の育成」と掲げ、「学びの共同体」のシステムと並行して「九九検定」、「言葉の式テスト」、「ドリルパークの推奨」等、学力向上のための取り組みを行っています。その成果として「学びの共同体」のみの効果とは言えませんが、令和6年度は学校全体として、算数科の「知識・技能」の中央値（全学年の中央値の平均値）が1年間で82.8から89.9と伸びました。また、「思考・判断・表現」の中央値は1年間で71.3から83.3と伸びました。

さらに、算数科の知識・技能で90点以上の児童の割合が、1年間で、39.1%から56.5%に、思考・判断・表現で90点以上の割合が37.1%から41%に増えました。一方、70点未満の児童の割合は、知識・技能で23.8%から16.3%に、思考・判断・表現で36%から27.4%に減少しています。

知識・技能よりも思考・判断・表現において伸び率が高いのは「学びの共同体」の学び合いによる効果であるととらえています。今後もこのような取り組みと分析を継続し、子供たちの学力向上に努めていきます。